

佐々木毅著「しゅうきょう 宗 教とけんりよく 権 力の政治—「てつがく 哲学と政治」せいじ 講義Ⅱ—」講談社 2012年11月12日刊を読む

倫理的徳、知的徳、神学的徳

そこで、人間の徳という問題に入ります。人間の徳目には三つあるというのがトマスの考え方です。

1. 一つは、倫理的な徳です。

- (1)これは人間の欲望が習慣づけによって理性や意志に従うようになる状態と、それによって可能になる人間の一種の行動能力、これが倫理的な徳であります。
- (2)具体的には節制があるとか、あるいは中庸を心得ているとか、正義とか勇氣です。
- (3)これらは古代からずっといわれてきた徳です。
- (4)これは倫理的な徳、モラル・ヴァーチャーというものです。

2. (1)人間はこういう徳目を持っているわけですが、この種の徳というのは実際の生活で実行しなければ意味がありませんから、それは結局、最終的にはどういう人間の能力に支えられているかという、倫理的な生活に対する正しい判断力、こういうときにはこうすべきだということ判断する能力がなければならないことになります。

(2)これは日本語では普通「思慮」と訳されておりますけれども、いろんなことを比較考量しながら判断していく能力というものが、人間の場合には必要だということです。

3. (1)しかし、同時に、人間は知的な徳も持っている。

(2)いろんな学問を修めたり、技術的な能力を身につけたりするような知的な能力も持っている。

(3)そして、人間である以上、この学問的な能力、技術的な能力、それと先ほどいった道徳的な、倫理的な徳を持つことが可能です。

(4)逆にいえば、こうした倫理的な徳と知的な徳を獲得するためには必ずしも信仰は必要でないことにもなります。

(5)これはアリストテレスの議論そのものです。

4. (1)しかし、トマスによればもう一つきわめて大切な徳がある。

(2)それは神学的徳と呼ばれるものであって、神の恩おんちよう 寵、特別の思し召しによって人間の中で発生する徳というものがある。

(3)例えば信仰という徳、それから愛という徳、希望という徳などです。

(4)先ほどの知的な徳や倫理的な徳は、人間が人間である限りにおいて持つことができる徳であるのに対して、こちらの方は、人間が信仰を持つことによって初めて備えることができる徳であって、レベルが違う。

(5)先ほどの言葉でいえば、神学に対応する徳ということです。

(6)ですから、徳の中には大別すれば自然的徳というグループと神学的徳というグループの二つがあって、その自然的徳のグループが倫理的な徳と知的な徳とに分かれているという構造です。

(7)神学部分と哲学部分との間には一線があり、究極のところ人間は後者から前者へと上昇していくべきものであるというのがトマスの見解です。

(8)そしてこの上昇を達成して神学的な徳を持つことが人間の最後の目的であるということです。

(9)したがって、徳の世界においてもまたランキングがあることになる。

5. (1)これはどういうことを意味するかというと、人間の最終目的は自分を創造した神のもとへ戻ることだということです。

(2)神へ戻るといいますか、神に回帰するといえますか、こういうことが人間の最終目的である。

(3)だから、技術的な知恵を身につけるとか、道徳的、倫理的な思慮や中庸の徳を身につける、正義を守るなどというのは、そこへ行くための最初の段階ということになる。

(4)いずれにせよ、最終的には人間としての究極の目的にまで到達しなければだめである。

(5)だから、結局、神は万物を創造し、神によって創造されたものは神に戻ることによって最終的に到達するということである。

(6)戻るといっているのはいろんな意味がありますが、神と人間とが究極的に一つの共同体を形成しているという考え方にもつながります。

(7)ここには、前の章で取り上げた宗教や信仰の持つ決定的重要性が再び顔を覗かせているのです。

(8)そして、自然の世界そのものが神の創造の秩序であるということを忘れるわけにはいきません。

P72 ~ 75

<コメント>

(1)佐々木毅先生の名著「哲学と政治」第2巻、「宗教と権力の政治」第2章「トマス・アクィナスと政治論—信仰共同体の分節化—」、第2節「徳の序列と法の体系」の中で最も参考になる部分です。

(2)「人間の徳」には

①「倫理的な徳」

②「知的な徳」

③「神学的な徳」

がある。

(3)どうこれらを意味づけるか。3～400年かけてようやく多くの人々に受け入れられ、キリスト教社会の精神的支柱となったトマス・アクィナスが果たした役割は大きいと思います。

2021年12月10日 林明夫記